

Peut-on jouir du capitalisme ? - Lacan avec Heidegger et Marx, Luis de Miranda, Max Milo Édition, Paris, 2008

Deuxième partie, Le discours du capitaliste : produire le manque à jouir

ひとは資本主義を享ずることができるか - ラカン、ハイデッガー、マルクス

リュイ・デ・ミランダ、マックス・ミロ出版、パリ、2008

第2部、資本家のディスクールまたは享樂欠如を生産すること

第二部、資本家のディスクール、つまり人々が享ずることに飢える仕掛けを生産し続ける

現代の主人のディスクール、それは「資本」の奴隷の最たるもの

主/奴の関係について、更にもう少し話を先に進めることにしよう。なにせラカンは資本家のディスクールは主人のディスクールの紛うことない現代版であるとしているのだから。「資本家とは現代の主人だ」1)とラカンは端的に言っている。ところで主人の本質について精神分析家が強調しているのは、奴隷とは違って、かれが自分がなにを欲しているのか知らないという事実である。

「ここに主人のディスクールの真の構造があるのです。奴隷は多くのことを知っていますが、特に秀でているのは主人がなにを欲しているかを知っていることです」2)。

このような主張はパラドキシカルにみえる。常識からして、主人は自分の欲しているものを知っているはずなのだが。じじつかれにはリーダーシップがあり、このリーダーシップという語が示しているのは、ひとを動

1) *L'envers de la psychanalyse*, p.34

2) *Ibid.*

かす能力とカリスマ性を併せもっているということなのだから。主人についての謬見にしたがえば、大衆が移ろいやすく矛盾に満ちた欲望のために逡巡しているときに確固とした、疑念に惑わされない意志でことに当たるからまさしく主人といえるということになる。

同様に、奴隷が主人の欲しているものを知っていると主張は一見して事実と正反対のようにみえる。その論拠として、例えば工場というものを引き合いに出せば、工場経営者は機械が円滑に動いていて故障が起きないように管理する立場にあるからという見方である。つまり主人ならば生産の成果と手段について包括的なヴィジョンを持たなくてはならないのだが奴隷は極く部分的なヴィジョンをもつだけでよいといった主張である。

しかしラカンは、当然のこととして、自分が掲げた命題を別な論理、無意識の論理の次元へと展開する。もし主人が単に「うまくことが運ぶça marche」ことを欲しているのだと言ったとしても、このçaという言葉の精神分析的ディスクールにおいても特別な意味significationを見失ってはならない。主人はことがうまくいくことを願っているのではなく、エスçaが機能することを願っているのだ。主人の欲望は小鳥が囀っているみないなものであり、明るい未来(les oiseaux ou les lendemains chantent)とはいうが、主人はこの小鳥の啼き声が

なにを意味しているのかは無頓着なのである。

ラカンは繰り返し説明している。ひとが活動するときそのひとの無意識は無意識的なままにあると。なかでも「わたしが考えるところにわたしはいない」といった定式は人口に膾炙している。主人という語についてのラカンの定義を巡って、ヘーゲルへの準拠は明白であるとして、ニーチェの力への意志の影響をも受けていると読み取ろうとするのは正鵠を射たものである。畢竟、知らぬが仏なのである。この主人の満足しているとも不満足であるともいえる無意識は相手を蔑視する。奴隷はそのことで茫然自失し恥辱を味わう。奴隷はそこで主人個人に対してでなく、力に屈する。この力が奴隷を動かすのだが、それは例えば死に直面したときなど、自然の力の脅威に曝されたときと同様、抗いがたいのである。現代の奴隷はプロレタリアであり、主人を、対象aの反射が映し出された者であり玄義をもたらす者として受け入れるしかないのである。セールス・エンジニアリングの時代にあって、主人は、その言葉が多少とも説得力のある、ラスプーチンのような男である。

48頁

このような購買への依存構造においては見えないものl'invisibleへの過大評価を暴くことができる。つまりところ見えないものの過大評価こそ人間の疎外のうちの最たるものである。とかくわれわれは安易にカリスマにある力と尤もらしい神秘性を賦与する。逆に言えば、オーラを取り除き、ある現象についての論理的説明が与えられるならば、しばしばわれわれは幻惑から解放され、当たり前のように見過ごしていた態度を改める。演繹的な分析的説明をもってすれば、偏見によって成り立っていた偽りの智慧による不透明な表現に惑わされることも少なくなる。奴隷が主人において賛美しているものとは詮ずるにこの智慧であり、とかく智慧を備えた主人は余所者であり他者である奴隷の扱いは心得ているように見えるのである3)。

ところで、資本主義のリーダーたちを駆り立てるものは絶対への意識による直線的な力なのではなく、サド・マゾシズム間の循環的メカニズムなのである。剰余-価値に隷属している主人に関しては、〈他者〉の欲望ではなく、〈同一者〉の欲望について語るべきである。ラカンもこの点を指摘しているが、資本家の剰余-価値と主人の対象aとを同一の関係に置くことによってである。

主人のディスクールにおいてはaは労働者階級の思想、つまりマルクスの思想から発したものと完全に合致しています。つまり、象徴的にも現実的にも剰余-価値の関数とされてきたものです4)。

ところでこの剰余-価値とはマルクスにとってなになのか。『資本論』の仏語訳の訳者であるルフェーヴルはこの剰余-価値をplus-valueではなくsur-valueと翻訳した。この訳に込められた意味とは、資本家にとって、生産されるものとは単に有用な、使用価値のある対象なのではなく交換価値を有する対象、つまり商品な

3). *Ibid.*, p.41

4). *Ibid.*, p.49

49頁

のである。この商品の価値を引き上げるためには、当の商品の生産に必要な他の商品の価値ができるだけ圧縮されるまで、それを可能にするのは労働者の賃金をできるだけ低く抑えることである。労働力la force de travailはこうしてそれ自体が商品と看做されるようになり、そこから必然的に価値が発生してくる。そうするためには、賃金は、現実に提供された労働の時間に相当してではなくnon au temps de travail fourni、当の労働者の生存がぎりぎり成り立つのに必要なだけの金額にされるべきである。

生産手段の所有者でありまた賃金を支払う管理者でもある資本家は過重労働を当てにする、つまり労働の取り分でありながら賃金に反映されない金額を見込むわけである。その結果として諸商品の剰余-価値survaleurを生むようにし、資本を増強し競争原理の場に参加するのである5)。剰余-価値はもともと労働の側にあるのだが、主人はこれを奴隷から奪い、自由経済のもとでの企業の永続性を保障し、主人が主人の生活とステータスを誇示できるようにしているのである。

だが結局は、剰余-価値が生み出すものが資本家の主体に横取りされる、これには拒むことができないとするのは幻想である。奴隷であれ主人であれ、どのみち消費者訳注1)なのであり、この幻想は消費者としての奴隷の欲望、主人の欲望の対象を生み出すものである。この意味では、主人も唯一の生きている主人である資本の超奴隷に過ぎない。

ではいかにして剰余-享樂は剰余-価値の圧政の下で開花するのであろうか。

享樂とは神の真似である

剰余-享樂とはなにか。それは快樂を通り越すsurplaisirといったフィクションの作品である。快樂を通り越すとは快樂のロジックの線上にありながら蓄積による快樂の階層化であり、この蓄積は量的モードに基づき資本として数え上げること、増強することで表される。このような享樂の量化の試みとは、剰余-享樂をグラ

5). Marx (K.), *Le Capital*, PUF/Quadrige, p. 218

50頁

フィックで表現できると思わせる点にある。様々な変容(トリュフ・ショコラ、週末はイビザ島で、プラダのハンドバック、週間Voilà誌のポートレート写真…)をである訳注2)。ラカンを読めば、これらはまじものleurreでしかない。相対的な享樂の消費など存在しない。というのも享樂は快樂ではないのだから。市場社会が生み出す快樂のタイプ、それはしばしばひとが他人の話に耳を傾けなくしてしまう6)…

フロイトにおいては、快感原則は快感の限界設定の原則であった。主体はそれ以上は耐えることはできない「剰余-享樂」の限度というものがある。快樂が絶対的、圧倒的で到達不可能かつ危険なものであるとするとき、これをラカンはこれを享樂と呼んだ。この恐怖ははふたつの思考モードの結託により生まれる。量に関する思考で存在者に関するものと質的なものに関する思考であり、存在によって希求されるものである。この問題は後述することとなるが、ラカンは享樂と神的なものを関連づけていることに着目したい。これは感覚主義の色合いを持ったカントの論理に通ずるものがある。次の驚くべき一節を思い起こそう。

神の实在の唯一の可能性、それはかれII(大文字のイーのイル)が享ずるという事実であり、神そのものが享樂であるという事実です7)。

もし享樂というものが存在するならばそれは神との一体化である。ひとがこのことを恐れるのは言語の事実からであり、そこから生じてくる欠如によってである。神は充溢としてだけでなく空の希求としても現れるからである。

享樂、それはダナイドスの墓です8)。

6). 周知のように、ラカンは地口に興ずる。tourbeはpopulace「下賤民」を意味する古い隠語であるが、「自-遺」«masse-tourber»つまり「大衆-下衆」を自作のものと認めてないわけではない。

7). Lacan (J.), *L'Envers de la psychanalyse*, p. 75.

8). *Ibid.*, p. 83.

51頁

主人は神の側近に名を連ねる者だと自認している。かれの支配は享樂の剰余-価値の幻影をめぐる市場占有による。主人は実際には資本主義を享じてはいない。そうではなく、かれの享樂のフィクションが上手く働いていると満悦なのである。ただし商品の蓄積の道を断つ畏れは残るが。例えば「バスターナー」パートナーを侍らせながら、かの女のピキニは露出度の高いものがお好みとなれば、パートナーと較べピキニという商品は取るに足りないものとなるからである(訳注3)。

ここにアポリアが生じてくる。ラカン理論の中核にある絶対に対する禁止が逆に世の中が競争的で相対主義的、量化論的なかたちで現れることを助長しているようにも見えるのである。となればペシミズムが幅を利かせることとなる。もし、存在・Êtreがわれわれには禁じられているのだとするならば、支配への空想に耽るのは当然だとも言えないか。

しかしながら少しずつ現実味を帯びた希望も湧いてくる。というのも、もし超-個人の絶対というかたちが空想的な神話に過ぎないとしても、個人-内の絶対については同様ではない、クリエイティブ・コミュニティー communautaire créatif 9)の絆が生まれる素地はあるのだ。ラカンが1967年に述べているように、「無意識、そ

これは政治である」。

この道を辿ることができるかどうか、その前に資本主義社会における欲望と商品の蓄財との関係を明らかにした方が良いだろう。

資本家のディスクールすなわち絶対商品(註4)の誘惑

資本家のディスクールにおいて、ラカンが指摘するS2は奴隷の側にある10)。つまり商品は労働者の側にあることになる。

生産が女王である時、生産者はシニフィアンの鎖のなかで、それ自身、他のシニフィアンの鎖の対象となる。

9). この語は今日communautésと呼ばれているものとはなんの関係もない。communautésとは人間同士の新たなあり方を指したものでしかない。(クリエイティブ・コモン《フランス語ではcommunauté créativeと訳されている》を意識しての原著者の造語か：訳者)

10). *Ibid.*, p. 38

52頁

消費のモデルが支配的であるのは、消費することで身を焦がすことにある。資本主義が享樂をもたらさないのは確かであり、そうでなく享樂に向けての束の間のあるいは倒錯的な混乱があるだけである。つまりマシンは回っているが、それは当のマシンがトラブルを起こすために回っているとも言えるのである。

資本家のディスクールとは極めて狡猾なものがある。極めて狡猾なものであるのにバンクする宿命にある11)。

じっさい、剰余-価値は享樂と同一化できないものである。

というのもこの貝殻=貨幣、剰余-価値は欲望の原因であり、そのなかの一構造はこの欲望の原因によりその原理を作っているのです。曰く生産の広域化という原理です。広域化により享ずるには欠如が生じるようにする飽くなき生産です。剰余-価値は蓄積され、一方で資本というかたちでこの生産の手段は増殖して行きます。また一方で消費を拡大させます。消費がなければ生産は無意味です。まさにそのことにより享樂を与えてしまう愚にもつかない生産になりますし、自ずから生産はその速度を落とすこととなります12)。

消費の加熱といった体制の下ではだれもがプロレタリアであり、要するに主人は金(かね)に多少とも恵まれたプロレタリアなのである。絶対商品と呼ばれるものの幻想の最中において、享樂は消費する主体においては

11). Lacan (J.), Conférence à l'université de Milan, 12 mai 1972

12). *Radiophonie*, p. 87

13). Avec la complicité de la publicité (『広告の共犯』)。このタイトルの下で広告の興味深い哲学的努力を読むことができ、この職業の隠された論理を理解することができる dans *La Société de consommation de soi*, de Dominique Quesada.

53頁

部分的、局在的なものに過ぎない。絶対商品なるものはその生産が常に差し迫ったものではあるが常に延期されるものである14)。

マーケティングの前線において革新的用語を生み出そうとするディスクールのヒステリー的要求はこの絶対商品Marchandise absolue(MA)の期待と必然的なフィクションを映し出し、そのような幻想を生んでいるのであるが、それは享樂の充溢と極域へと至る対象ということになる。奴隷は、剰余-享樂に目が眩み、広告版に飛びつき、この「革新的」商品を購入するか手にすることを夢見る。MAはまるで魔法を使っているかのように、

例えば歩調を合わせるように、絶対愛人と絶対アルバイトというふうに入ることができる。資本家のディスクールにおいては主人はかれ自身が消費とMAの地平を通じて吸収される。いかにして資本はその手駒であるすべてのプロレタリアの主体を動かそうとするのかは後に明らかにする。

しかしいったいどのようにして絶対商品、消費者のニルヴァーナは全体経験'Expérience Totale'の門戸を開くとされているのか、われわれの欲望を催眠にかけることができるとでもいうのか。

いったい欲望とは正確にいうとなになのか。

純粋な欲望：カントとサド

享楽と欲望についてのラカン理論をより明らかにするためにベルナール・パースの純粋な欲望15)からの一節、さらにラカンのセミナーVII巻を通じて作業を行うことが適切であるように思われる。パースは哲学的20世紀は「終焉」の世紀であると記している。

14)絶対商品が顕現するグローバル資本主義の最後の征服の試みはアップル社のiPhoneが現れた2007年11月に遡る。ボードレールが芸術について述べている部分を思い起こそう。ボードレールが言うには、芸術こそが「絶対商品」なのであり、それゆえ、現代芸術の空虚な-硬質の-芸術へのヒステリックな投機もこの絶対商品の証となる。

15). Baas (B.), *Le Désir pur. Parcours philosophiques dans les parages de J. Lacan*, Peeters, 1992.

54頁

語る者としてあるいは思考する者として(われわれは今やこのふたつのものが同じものであることを知っている)。終わりはわれわれに強いられたものである。終焉はわれわれの義務である。この終わりは唯一われわれに残された命令なのではないか16)。

この一節は、逆転された鏡面において、コマーシャルのメッセージ(「私には限界がない」)を答えとして要求しているように思える。われわれは、本節の導入にあたって、このメッセージは資本主義により、さらに剰余-価値の命令により、生じてくるプシケーのモードを要約していると規定する。すべてのロマンチックな夢(歴史的な意味においてである)が高揚感をもたらすように働いていたのとは逆に、現代の資本主義による夢は、別稿17)でも示したとおり、この高揚感を回収するものであり、そもそも個人は個人としては絶対的な享楽への入り口は断たれているであり、そこに向かおうとする試みも精神衛生上好ましくないとされる。政治的に、さらに道徳的に、終焉とは人間による、自身の限界についての自己批判の甘受であり、このことは消費という苦行に結びついており、かつてない社会的絆をつくりだす「命令」でもある。

この命令がカントの定言命令 - こう書かれてある「格率に従い、但しこの格率が同時に自然の普遍的法としての対象となるべく行動せよ」 - と同列であるのは偶然ではない。ラカンは実践理性批判を熟読しており、この読解から生まれた成果がカントとサドと題された短いテキストに集約されている19)。

われわれは、ここでは、このテキストの徹底した分析を繰り返すことはしない。既にこのような試みはわれわれの試論Ego tripのXIII章で済ませているからである。ただし、自然の決定論的概念が要になっており、

16). *Ibid.*, p. 7

17). *Ego trip, la société des artistes-sans-œuvre*, Max Milo, 2003.

18). Kant (E.), *Métaphysique des mœurs*, trad Alain Renault, GF/Flammarion, p. 108

19). In *Écrits II*, Points/Seuil, 1999, p. 243

55頁

カントとサドはこの要の部分を補完するものとなっていることは繰り返し強調したい。

「神の侯爵」=サドは閨房の哲学において確信を込めて述べる。自然、この世の生は絶えざる腐敗、破壊であると。あらゆるものは死に姿を消す。この原則は普遍的である。ラヴォアジエの定式では失われるものはなにもなく創造されるものもなく、すべては変容するのである、となる20)。そうであれば、とサドはそこから演繹し、どれほど暴力的な傾向に身を委ねたとしても、科学によって観察された結果出来上がる普遍的立法に

沿ったかたちでひとは行動することに変わりはない。さらに言うならば、破壊すればするだけ、その分「自然な」こととなる21)。

カントとはいえば、個人に対してこう提言する、道徳的にならんとするならば、パトローギッシュなもの根から、自らの「生活上の趣味」から身を断つようにと。このついでに後年、何人かのナチ黨員(ハンナ・アレントが指摘するには、将校アイヒマンは審判に際して、生涯自分はカントの道徳上の教えに従ってきた、と発言したと22))の姿勢が引き合いに出された。定言命令は政治的、経済的システムに基づく人間の大量殺戮を阻むことができるのか。なにせこういったシステムは宇宙論的無関心すなわち自然は絶えざる破壊の後に再構築を行うという思想に倣っているのだからといえるのだろうか。

誰もが否応なく認めざるをえないのは、現代資本主義におけるエゴは、万人が万人に対して闘わなくてはならないという自然状態に率先して倣うという意味で自然主義的であるのだが、これがみかけ上は、矛盾することなしに、カント的道徳に支えを受けているということである。わたしは他人には冷淡なエゴイストであり超競争的精神の持ち主として行動する、というのもこの行動規

20. この定式はソクラテス前の哲学者アナクサゴラス・クラゾメナイ由来のものである。

21. 「フランスじよ、共和国主義者たらんとするならもう少しの努力を」、Max Milo, 2000.

22. *Eichmann à Jérusalem. Rapport sur la banalité du mal*, Gallimard, 1966. p. 152.

56頁

範が「普遍」の法なのであり、最終的には法はすべてが丸く収まるかたちで顕となる。ある日に…である。

しかしながら、際限のない享楽への意志とは実際はビュルレスクであり(そしてサドは偉大な風刺家である)、事実、人間は、今となっては自然人ではいられない。人間は既に言語的存在être de langage(レヴィ=ストロースによれば文化的存在être de culture)であるからだ。人間個人(ひと)がルソーのいうような「自然状態に戻る」ことなどありえない。ひとは常に自然からその外に出て行き、動物の生活とは離れるのであるが、それはこの外へという幻想、「真の生活」を生むことばの構造によってそうなるのである。

カントの道徳感はもちろん厳格主義であり快楽主義ではない。この点で、みかけ上はカントの道徳感が現代人への適用が難しい。享楽への意志としての欲望が現代人のこの世との関わりに固有のあり方であることからしてそう見えるのだが。

これに反して、純粋理性批判は欲望をめぐるラカン精神分析に着想を与えている。たとえば対象aはラカンによれば無条件的にア・プリオリ訳注5)と看做される。精神分析の実践をよどころとしながら欲望の理論が演繹されてくるのであるが、ラカンは、フロイト以後において、比類なきやり方で「もの」*das Ding* (La Chose)という語をめぐる対象を、欲望の対象がことばに尽せない、表象不可能な、あらゆる命あるものあらゆる現象によって体現することのないものとして取り上げた訳注6)。

「もの」は、もしそれが完全に覆い隠されていなかったならば、われわれに強いるこの関係性のもとで - あらゆる精神活動がそれに強いられているのと同様にです - この当の「もの」の輪郭を描くさらには「もの」の周囲一巡することによってもそれを把握することもなかったでしょう23)。

カントの悟性が現象しか知り得えず、一方で絶対者は仮言的イデアに止まるのと同様、欲望は、常に満たさ

23). Lacan (J.), *L'Éthique de la psychanalyse*, Livre VII du Séminaire, Seuil, 1986, p. 142

57頁

れないまま、他のものに向かい、結局その目標つまり「他者」には到達しない、これは「他者」が欲望力*la faculté de désirer*(訳注7)に対して純粋なア・プリオリであることからしてそうなるしかないのだ。ここから現にある個人を構成する欠如がもたらされる。これに結びついているのがこの個人の「自由」が欲望しながらもけって十全には自己実現できないままにあるという現実だ(ともあれ、この空虚は、明らかとなり、生きる-知恵となることも許されている)。

話を展開させる前にもう一度要点を再検討してみよう。欲望を可能にするもの、それは超越論的な非-対象 (non-objet tanscendantal)であり、これをラカンは対象aと名付ける。対象aは言語の相対的そして原初の構造がもたらす論理的裂け目である。この裂け目こそ欲望の構造における穴(ダナイドスの樽で有名な穴)である。この点で、ラカンの目から見ると、サドに対するカントのエピステモロジックな優位が示される。サドのような人物が第一級の人物とされるのはある種の実存主義的倫理との関係においてである。

閨房の哲学の自然主義は機知に富んでいる(しかも見ての通りサドは機知に冷笑的な彩りを加えている)。登場人物で直向きにこの主義主張によりどこを求めて享ずる者24)は愚直なまで自己破壊の歌い手として登場する。

理解すべきは、消費者にとって、喪失は歴として欲望以前のものなのである。〈もの〉は「シニフィエ-外」のものであり、ひとはこれとは、悲壮な関係しか結ぶことしかできない。欲望とは「つねに文字通り受け取ってはならない欲望であり、つねに欲望の欲望25)」であり。そして個人の絶対的、他者、は、「せいぜい悔恨をも

24). 33歳の小児愛被告でアレズキ・メウーシュの事例である。かれは2007年10月、11歳にも達していない子供たちに対する暴力行為の廉で裁判にかけられたのだが、ローヌ重罪院の法廷で、サドを抛り所としてこう言った「わたしが生まれてきたことが間違いだったと思い嘆けといっても無駄だ。わたしは自然が育んだ者なのだ。もしわたしの性向とわが国の法との間に対立するものがあるとしても、この齟齬をわたしの責任に帰することは断じてできない」と。

25). Lacan (J.), *L'Étique de la psychanalyse*, p. 24.

58頁

って巡り会う」26)のである。この常に欲望のフィクションである絶対的对象は、はわれわれにこれを追い求めるように駆り立てるが甲斐なしなのであり(フロイトはこの衝迫を「再度見いだすこと」*Wiederzufinden*)と呼んだ)、資本家のディスクールにおいてはMAでありCU(全国の人参Carotte universelle)訳注8)であるのだ。

絶対に関しては、ひとはもう既に完全に、意識してそして持続可能な形で享ずることは諦めて然りとされている。ラカンは哀調を帯びた調子でひとに許されていることは以下のことしかないと述べている。

「... 身体と世界を完全に皮膚を通じて密着させようとする夢、そこでは世界も解き放たれ身震いをする、この密着の夢、その背景にあるのは詩人がわれわれに行き先と道を示している、当の詩人の放蕩的な生活スタイルです27)…」

知りえないものであり論理的に無制約な「ヌーメノン」についてのカント的なモデルが欲望の原因にさらにその結果としてのわれわれの欠如に貼り付いているのだ。個人にとって、対象aとしての、存在の消失 *disparition*は分-割*dis-partition*であり、基本的切断*coupure*であり、これが当の対象に斜線を引き(ここから主体は斜線を引かれた主体となる)。なにを切断するのか。現実の、そして神の享樂か。否、そうではなく、「絶対ゼロ」、「心的死」の切断である。心的死とは、仮に絶対商品を実際所有することが許されると仮定したとき、この絶対商品の代償となりうるものであるが、そんなことはありえないことである。

こう考えると資本家ダイナミズムも非常識ではあるが巧妙にできていることが解る。資本家のダイナミズムが主張するのは充溢へに向けての進歩であるがそのロジックすべてが、自然と、技術、のまやかしであり現実離れした和解を目指しているからである。なにしろこのような和解は今日でも「ヴァーチャル」と呼ばれているのであるから。現にますます多くの魂はあくせくとインターネットに接続されたディスプレイ画面上で求心性の愛と享樂をに引き寄せられて行っているではないか。かれ等はメッセージを書きディスプレイ画面の向こう

26). *Ibid.*, p. 65

27). *Ibid.*, p. 112

59頁

側に籠絡され、こうして対象aの神話的機能は増強される28)。

絶対的無制約性は、認識のそれも含めて、欲望の「創造的焦点」を成す29)。この意味を踏まえて資本家の

ディスクールを通じて生まれる一般化されたプロレタリアというものについて語るができることとなる。われわれはしばしば、いわゆる暇な時間を含めて、絶対商品の神話の生産者-消費者となってしまっているのである。この一般化されたプロレタリアについて述べる道すがら、「想像的焦点」たる絶対商品が相対的商品の流通を可能にすることが明らかとなる。

いかに。

一般化されたプロレタリア：対象が命ずるとそうなる

資本主義はつまるところわれわれの不安に抛り所を求めている。ところで不安は、ものの原初的欠如によって生じてくるものである。世の中が対象によって覆い尽くされ、世の中そのものが資本化されると社会的絆はますます希薄なものとなる。社会的絆により世の中の荒れ狂う貪欲さは緩和されるはずなのに、われわれのささやかなお一人様の欲望も標準化の憂き目を見るしかなくなっている。特に広告によって、そして大量生産によってである。精神分析化コレット・ソレールが「満足の形式の同質化30)」と呼ぶ現象である。

ということは、われわれには新しいかたちの順応を迫る超自我があり、もはや他の神Autre divinも道徳の声もない。…われわれの時代のあらゆる広告はイメージの感染によって命令することを目論む。

28). 出会い系のサイトで一番有名なのはその名からしてMeeticである。こう語りかけてきているかのようだ「後ほど通知いたします。真の出会いはすべてその時から神話の側に組み入れられます。

29). Baas (B.), *Le Désir pur*, p. 59

30). *In revue Link 9*, «L'angoisse du prolétaire généralisé» extrait d'un cours de janvier 2001.

60頁

つまるところ、広告とは自己愛的競合のバネが働くことを見込んでいるのである。

資本主義世界におけるすべての対象は想像的に階層づけらる。あたかも絶対商品へ漸近的に向かう一連の商品見本のようなものである。空の台が階段状に備えられていて、その時点でもっとも「喜ばれる」(そしてしばしばもっとも高価である)商品見本が置かれているようにだ。これらの希少性と高嶺の花とを兼ね備えたこれらの最高級モデルはあらゆる分野の消費欲の混淆により調度された商品である。資本主義マシンが欲望への圧力、幻想を、一方で、うつ、罪責感を伴う諦念そして自己評価の下落を欲望のピラミッドのゲームで演じるように作動している。ナルティシズムとは自己を規定する勇気をもち得ないまま、自己の独自性と自己への愛とを混同することであり、大衆-下衆化mass-tourbationは嫉妬という障害を生み続ける。7

以上で述べたことすべてが、コレット・ソレールによれば、ラカンの次のような式で示されている資本家のディススクールに記されているという：

$$S \text{ barré}/S1 > S2/a$$

このディススクールにおいては、命令の占める場所を見いだすことができない。つまり、主体の亀裂はMAに吸収されてしまっているということだ。

対象は主体に命令する。たしかに矢印の回路は連続的であり、起点もなく断絶部分もない。この点が資本家のディススクールで重要なところだ。それゆえ、これはラカンも述べていることだが、生産の対象に対して、主人に対する以上に、主体はかれが被る搾取の勘定書きを求めて然るべきなのである31)。

31). *Ibid.*, p. 38

61頁

主体は対象に支配されている。しかも生産される対象はMAの神話によって支えられた、尽きることのない流れに乗っかっているのだ。主体はもはや他の主体と結ばれることはなく、対象に結びつけられておりこの対象

が主体を分割しているのである。地下鉄で隣に座っている自閉的な輩のデジタル・オーディオプレーヤーを叩き壊すことが的を得た行為かもしれない(が、これは誘惑の最良の戦術のように映らない)。

畢竟、対象はわれわれの疎外の中心に鎮座している以上、消費の過程においてなにが起きているのかをよりよく理解することがわれわれに求められているのだ。

62頁

訳注1). 消費者はフランス語でconsommateurでラテン語consummatorからの転用である(1525年)。動詞consommerはconsummareからの転用、接頭語conはラテン語前置詞cum(「…と共に」といった語義)+summa(=somme)で文字通りには「…の総計を出す」の意であるが、「完成する」「完遂する」の語義を持つようになった。消費consommationは同様ラテン語consummatio(フランス語accomplissement, achèvement, perfectionつまり「完成」を意味し、キリスト教著述家たちにより時の完成つまり終末世界fin du mondeという語が生まれた(Dictionnaire historique de la langue française, Le Robertより)。

価値というものは受給によって決まるものである。サプライサイド経済とはいえ、消費者が納得した価格を支払い商取引は成立する。つまり価値(=価格つまりお金、といった幻想は商品経済において堅固なもので、労働価値説は容易に受け入れられない)は最終的に消費者が決定するものともいえる(日本語では「お客様は神様」であるのである)。

一方でconsumationというフランス語であるが、consumerがラテン語consumereからの転用で、con(cum)+sumere「引き受ける」つまり「自ら引き受ける」という語義があったが、奇妙なことにsus(e)mereという語と混同されるようになった。ここからconsumereはフランス語consumerと同義、「消費しつくす」ものとして用いられていた。名詞consumationは15世紀頃はconsumption(«病気などによる»消耗、衰弱)とほぼ同義に使われていたようだが、語consommationに影響を受けてきて「消費すること」の延長線上の語義をも持つようになった。興味深いのは、バタイユの1943年の『内的体験』では、消費、過剰、破壊、暴力との結びつきでこの語が使われていることである。例えば、La fête ancienne, oubli de tout projet, consumation délirante … (Centre National de Ressources Textuelles et Lexicalesより)。

英語では類語として動詞ではconsume(ラテン語consumere→フランス語consumer→英語なのだろうが、ここどこかでフランス語consommerが紛れ込んできたのではないか)しかない。Dictionnaire historique de la langue françaiseにはラテン語が公用語出会ったキリスト教社会においてはconsummareとconsumereの混同は決してなかったとしている。

Luis de Mirandaからしてconsommationとconsumationを混同しているのではなからうか。もっともconsumateurというフランス語は存在しないのでconsommateurという語をしょうがなく両義的に使ったのであろう。

訳注2). 例えば、ミシュランでもamazonでも星の数で価値(評価)は示される。もっとも、前者ではトイレが男女兼用ではひとつの星もつかない(覆面記者も消費者、すくなくとも「消費」の側に立っている)がamazonの場合はqualité-prixも意識している場合があるが。

訳注3). キャピタリズム=フェティシズムのグロテスクな逸話である。

訳注4). 「絶対商品」という語を用いたのはアガンベンが嚆矢ではなからうか。ボードレールのパリ万博体験についてのStanzeの記述を参考にされたい(邦訳:「スタンツェ」ジョルジョ・アガンベン、岡田温司訳、ちくま学芸文庫、087頁-)。

訳注5). 『純粹理性批判』、序論、II、超越論的哲学の区分、A稿(熊野純彦訳、作品社p. 65-67、2012年)、(Kritik der reinen Vernunft, Kant, I., Einleitung «nach Ausgabe A», Verlag von Felix Meiner in Hamburg, 1952), p. 58によると、「…このような学の区分にさいしてもっとも注意すべきは、なんらか経験的なものをうちにふくむいかなる概念も紛れこんではならないことである。いいかえれば、ア・プリオリな認識はかんぜんに純粹でなければならない。だから、道徳性の最高原則やその基本概念は、ア・プリオリな認識ではあるけれども、それでも超越論的哲学にはぞくさないことになる。快や不快、欲望Begierde、傾向性、選択意志など、総じて経

験的な起源を有する概念が、そこでは前提とされざるをえないだろうからである。したがって、超越論的哲学とは、純粋な、たんなる思弁的な理性による世界知である。すべて実践的なものは動因をふくむかぎりで感情に関係し、感情は経験的な認識源泉にぞくするものだからである」とある。しかしながら、カントの「もの自体」が不可知であるのは悟性、つまり理論理性にとってであり、このノウメノンの原因(とカントは言う)の概念の实在性は道徳的法則によって規定される、といった趣旨のことを『実践理性批判』の幾つかの箇所で明言している。Luis de Mirandaが、次いで、「絶対者は仮言的イデアに止まる…」としているのは理性の理論的使用による思弁の空転がもたらす仮象であり、『純粋理性批判』のひとつの目的である伝統的形而上学に対する批判であり、他方、『実践理性批判』では第一部、第二篇、第二章のいわゆるアンチノミーの解決、思弁の理性に対する純粋実践理性の優位について、等を通じて、例えば先験的自由というものが、第一批判においては蓋然的problematischな仮象としてしか提示できなかつたものが、純粋実践理性の存在が確証されそれに属する概念として純粋実践理性の絶対的自発性が確証されれば、これは確然的apodiktischな実践的自由として確立してくる。高峯一愚著『カント実践理性批判解説』によれば、「自由は思弁の理性における三個の理念のうち、われわれにとってその可能であることを、認識はできないにせよ、ア・プリオリにする唯一の理念である。自由はわれわれの知る道徳法則のための条件をなすものだから。しかし神と不死との理念はいずれも道徳法則の条件をなすものではなく、道徳法則によって規定された意志が必然的に求める対象[最高善]のための条件をなす…」。

こうして純粋実践理性の弁証論において最高善、ついで不死、神の实在が確立されるわけであるが委細は述べない。訳者としての問題提起はLuis de Mirandaが『純粋理性批判』と『実践理性批判』をテーマの異なった二著作と看做している節がある点であり、訳者としては、カントにとって理性に純粋理性と実践理性というまったく異なった二つがある訳でなく、理性はひとつでその理論的使用と実践的使用が分けられるとする高峯の節に与する。セミナーVII巻、『カントとサド』等は確かにカントの実践理性論の批判として読めるが一筋縄ではいかない。因みに『純粋理性批判』批判の方はラカンはセミナーX巻で行っているがそれは超越論的感性論の批判である。ラカンがトポロジーを用いる論拠が明快に理解できるものであるが、これは別稿で述べた。

訳注6). 端的に補足するならば、「失われ対象」とか「対象喪失」といった表現は精神分析の神話的領域に属すものである。これを脱神話化する作業を行ったのがラカンである。この作業におけるラカンはアンチ・フロイディアンと言ってもいいかもしれない。少なくとも、フロイトのディスクールにおける曖昧な部分をデカンタシオンしたとしてよかろう。もし実際に失われたものであれば、見いだすtrouverのではなく再度見いだす retrouverことは可能であろうし、人間はそう思ってその都度その「対象」を求める。しかし「失われた」とされる対象はそもそも存在しなかつたし、それに相当する対象も現実には存在しない。この対象として現前していないものが「もの」la Choseである。それでも人間は欲望する。そして幻滅する。

訳注6). 端的に補足するならば、「失われ対象」とか「対象喪失」といった表現は精神分析の神話的領域に属すものである。これを脱神話化する作業を行ったのがラカンである。この作業におけるラカンはアンチ・フロイディアンと言ってもいいかもしれない。少なくとも、フロイトのディスクールにおける曖昧な部分をデカンタシオンしたとしてよかろう。もし実際に失われたものであれば、見いだすtrouverのではなく再度見いだす retrouverことは可能であろうし、人間はそう思ってその都度その「対象」を求める。しかし「失われた」とされる対象はそもそも存在しなかつたし、それに相当する対象も現実には存在しない。この対象として現前していないものが「もの」la Choseである。それでも人間は欲望する。そして幻滅する

訳注7). カントの『判断力批判』(Urteilkraft)のフランス語訳がfaculté de jugerであるのでそれに倣ったのか。訳者はラカン自身がこと表現を用いているのに遭遇したことはない。

訳注8). Paulin Gagneという弁護士、ジャーナリスト、詩人の創作したl'Unitéideというタイトルの音楽劇(?)のなかで詠われるラ・マルセイエーズの歌詞のパロディーというか替え歌(Allons enfants de la Patrieの替わりにAllons enfants de la carotteで始まる)のことを指しているのであろう。

